日田市埋蔵文化財調査報告書第69集

尾 漕 2 号 墳

2006年

日 田 市 教 育 委 員 会

ウッドコンビナート計画地遠景（東から）

尾漕 2 号墳全景（東から）

長迫遺跡から尾漕 2 号墳を望む

第 1 主体部（右）と第 2 主体部（左）

第 1 主体部人骨・遺物出土状況

第 1 主体部素環頭大刀出土状況

第 1 主体部刀子・縦櫛出土状況

序　　文

大分県日田市は周囲を1,000m級の山々に囲まれた小さな盆地に市街地が広がり、それを取り囲む林野は市域約666㎢の85％を占める山間都市です。この地形的特性を生かした林業は「日田杉」というブランドを創出しました。90年代初頭のバブル崩壊で危機に直面したこの基幹産業を守るべく計画されたウッドコンビナート（日田高度総合木材加工団地）は、現在では日田の木材の一大集積地としての機能を担っております。

本書はこのウッドコンビナート建設事業に伴いまして発掘調査を実施した有田塚ヶ原遺跡群のひとつ、尾漕２号墳の調査内容をまとめたものです。この調査では２つの埋葬主体部が見つかり、市内に数ある古墳の中でも古式のものであることがわかりました。

貴重な古墳の調査成果をまとめました本書が、文化財の保護や地域の歴史などの普及啓発に、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました地権者および関係者の方々、そして寒暖なく作業に従事いただきました地元の皆様方に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成18年３月

日田市教育委員会
教育長　諫　山　康　雄

例　　言

1．本書は、市林政課が計画・実施したウッドコンビナート建設推進事業に先立ち、平成６年度～９年度に市教育委員会が実施した有田塚ヶ原遺跡群発掘調査のうち、平成８～９年度に実施した尾漕２号墳の発掘調査報告書であり、ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の３冊目にあたる。

2．調査にあたっては、市林政課、工事関係者および地元の方々にさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

3．調査現場での遺構実測は調査担当者が行ったほか、㈲埋蔵文化財サポートシステムに委託し、その成果品を使用した。

4．本書に掲載した遺物実測は調査担当者が行い、遺構・遺物の製図は担当者のほか中川照美(日田市文化財保護課調査補助員)の協力を得た。

5．空中写真撮影は㈱スカイサーベイに委託し、その成果品を使用した。

6．遺物の写真撮影は㈲雅企画　長谷川正美氏に委託し、その成果品を使用した。

7．尾漕２号墳第１主体部から出土した人骨の実測・取り上げおよび分析については九州大学に、また赤色顔料分析については別府大学に依頼し、それぞれ成果品をいただいたが、ウッドコンビナート建設に伴う発掘調査で実施した他の遺跡の各種分析とともに、後日分析編として報告する予定である。なお、まとめの中では、遺跡の性格上からその成果について一部触れさせていただいていることをお断りしたい。

8．挿図中の方位はすべて真北であり、文中の方位角も真北で示している。

9．写真図版の遺物に付した番号は、実測図番号に対応する。

10. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。

11. 本書の執筆・編集は行時志郎（日田市農林経済部農政推進課）の協力のもと行時桂子が行った。

日田市の位置

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに
⑴　調査に至る経過 …… 1
⑵　尾漕２号墳の調査 …… 3
⑶　調査組織 …… 3

Ⅱ　遺跡の立地と環境…… 5

Ⅲ　調査の内容…… 7
⑴　調査の概要…… 7
⑵　遺構と遺物…… 8
1）　墳丘…… 8
2）　第１主体部 …… 10
3）　第２主体部 …… 17
4）　周溝 …… 18

Ⅳ　調査のまとめ…… 20
古墳の築造時期について…… 20
（付記）第１主体部の埋葬状況について …… 20

挿　図　目　次

第１図　ウッドコンビナート計画位置図（1/15,000）…… 1
第２図　ウッドコンビナート計画地（１期工事）遺跡位置図（1/10,000）
…… 2
第３図　周辺遺跡分布図（1/20,000）…… 6
第４図　尾漕２号墳位置図（1/4,000）…… 7
第５図　調査前地形測量図（1/400）…… 9
第６図　墳丘測量図および墳丘土層図（1/200、1/60）…… 11～12
第７図　第１主体部実測図（1/40）…… 13～14
第８図　第１主体部人骨・遺物出土状況実測図（1/10）…… 15
第９図　第１主体部出土遺物実測図（1/1、1/2、1/3）…… 16
第10図　第２主体部実測図（1/20）…… 17
第11図　第２主体部出土遺物実測図（1/2）…… 17
第12図　第１・２主体部および周溝実測図（1/100）…… 18
第13図　周溝出土遺物実測図（1/4）…… 19
第14図　第１主体部人骨実測図（1/15）…… 20

表　目　次

第１表　ウッドコンビナート建設に伴う有田塚ヶ原遺跡群の調査および
関連文献表…… 2
第２表　出土土器観察表…… 21
第３表　出土鉄製品観察表…… 21
第４表　出土漆製品観察表…… 21

挿　図　目　次

第１図　ウッドコンビナート計画位置図（1/15,000）…… 1
第２図　ウッドコンビナート計画地（１期工事）遺跡位置図（1/10,000）
…… 2
第３図　周辺遺跡分布図（1/20,000）…… 6
第４図　尾漕２号墳位置図（1/4,000）…… 7
第５図　調査前地形測量図（1/400）…… 9
第６図　墳丘測量図および墳丘土層図（1/200、1/60）…… 11～12
第７図　第１主体部実測図（1/40）…… 13～14
第８図　第１主体部人骨・遺物出土状況実測図（1/10）…… 15
第９図　第１主体部出土遺物実測図（1/1、1/2、1/3）…… 16
第10図　第２主体部実測図（1/20）…… 17
第11図　第２主体部出土遺物実測図（1/2）…… 17
第12図　第１・２主体部および周溝実測図（1/100）…… 18
第13図　周溝出土遺物実測図（1/4）…… 19
第14図　第１主体部人骨実測図（1/15）…… 20

表　目　次

第１表　ウッドコンビナート建設に伴う有田塚ヶ原遺跡群の調査および
関連文献表…… 2
第２表　出土土器観察表…… 21
第３表　出土鉄製品観察表…… 21
第４表　出土漆製品観察表…… 21

挿 入 写 真 目 次

写真１　市長視察風景
写真２　記者発表風景
写真３　現地説明会のようす
写真４　試掘調査風景
写真５　墳丘測量風景
写真６　調査指導風景
写真７　人骨取り上げ風景

写 真 図 版 目 次

巻頭写真図版１　ウッドコンビナート計画地遠景（東から）
巻頭写真図版２　尾漕２号墳全景（東から）
巻頭写真図版３　長迫遺跡から尾漕２号墳を望む
第１主体部（右）と第２主体部（左）
巻頭写真図版４　第１主体部人骨・遺物出土状況
巻頭写真図版５　第１主体部素環頭大刀出土状況
第１主体部刀子・縦櫛出土状況

写真図版１　近景（北東から）／近景（真上から）
写真図版２　近景（南から）／墳丘築造状況／周溝土層／墳丘掘下げ状況／
第１(左)・第２(右)主体部検出状況／第１主体部追葬状況①～③
写真図版３　蓋石検出状況①②／蓋石の加工痕／蓋石裏面／蓋石除去状況／
石棺検出状況／棺材除去状況／第１主体部完掘状況
写真図版４　第２主体部検出状況／鉄刀出土状況／第２主体部完掘状況／
第２主体部棺材／周溝完掘状況／周溝内遺物出土状況①～③
写真図版５　出土遺物

写真１　市長視察風景

写真２　記者発表風景

写真３　現地説明会のようす

Ⅰ　はじめに

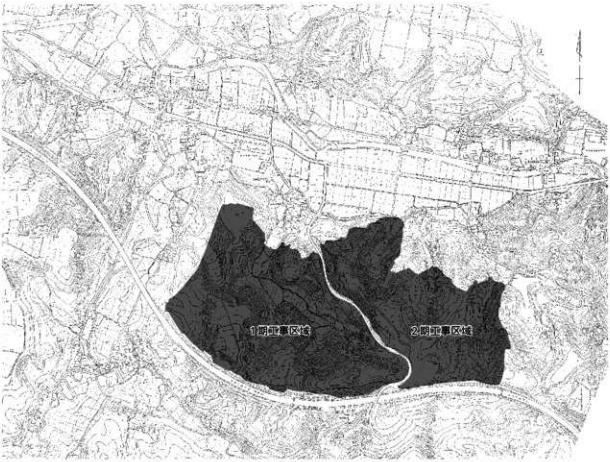
(1)　調査に至る経過

尾漕２号墳はウッドコンビナート建設地内で確認された遺跡である。

ウッドコンビナート（日田高度総合木材加工団地）事業は、日田市の基幹産業である林業の長期不況等の諸問題を打開し、また大分県が県西部の林業・木材産業の活性化を目指し策定したグリーンポリス構想に基づき、木材供給基地として日田市に計画されたもので、その事業主体として平成５年度には日田市役所内にウッドコンビナート推進室が設置され、平成７年度から平成10年度までの４年間を第１期とする開発面積677,315㎡もの広大な面積の建設工事が進められることとなった。

この工事着手に先立ち、平成６年度より予定地内の分布調査および試掘調査を実施し、７ヶ所で遺跡の存在が確認されたことから、これらの取扱いについてウッドコンビナート推進室と協議を行い、その結果これらは有田塚ヶ原遺跡群として、用地買収や樹木の伐採が終了した場所から随時発掘調査を行うこととなった。平成７年２月の平島横穴墓群の調査に始まり、石ヶ迫遺跡A・B地区、クビリ遺跡、有田塚ヶ原遺跡、祇園原遺跡、尾漕２号墳、長迫遺跡の順に進め、平成９年７月には尾漕２号墳と長迫遺跡の調査終了をもって現地での全ての作業を完了した。整理作業は平成７年度から14年度まで行い、整理作業が終了した平成15年度から調査報告書を順次発行している。

なお、有田塚ヶ原遺跡群の遺跡とその関連文献については次頁の表のとおりである。



第１図　ウッドコンビナート計画位置図（1/15,000）

第１表　ウッドコンビナート建設に伴う有田塚ヶ原遺跡群の調査および関連文献表

遺跡名	調査年度	関連文献名	報告書
平島横穴墓群	平成６～７年度	行時志郎他/「５　平島横穴墓群」『平成６年度（1994年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1996年 行時志郎他/「２　平島横穴墓群（HSY）」『平成７年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年	未報告
石ヶ迫遺跡Ａ・Ｂ地区	平成７年度	行時桂子/『石ヶ迫遺跡』/日田市教育委員会/2004年 松下桂子/「４　石ヶ迫遺跡（ISG）」『平成７年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年	報告済
クビリ遺跡	平成７年度	行時桂子/『クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡』/日田市教育委員会/2005年 行時志郎他/「６　クビリ遺跡（KBR）」『平成７年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年	報告済
有田塚ヶ原遺跡	平成７年度	行時桂子/『クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡』/日田市教育委員会/2005年 行時志郎他/「９　有田塚ヶ原遺跡（ATH）」『平成７年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年	報告済
祇園原遺跡	平成７～８年度	行時志郎他/「10　祇園原遺跡（GOB）」『平成７年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1997年 行時志郎他/「１　祇園原遺跡（GOB）」『平成８年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1998年	未報告
尾漕２号墳	平成８～９年度	行時志郎他/「５　尾漕２号墳（OKG-２）」『平成８年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1998年 行時志郎他/「１　尾漕２号墳（OKG-２）」『平成９年度（1997年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1999年	本報告
長迫遺跡Ａ・Ｂ地点	平成８～９年度	行時志郎/「７　長迫遺跡（NSK）」『平成８年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1998年 行時志郎他/「２　長迫遺跡Ａ・Ｂ地点（NSK-A・B）」『平成９年度（1997年度）日田市埋蔵文化財年報』/日田市教育委員会/1999年	未報告
有田塚ヶ原遺跡群全般	－	『有田塚ヶ原遺跡群』（概要報告）/日田市教育委員会/1999年	－

第２図　調査ウッドコンビナート計画地（１期工事）遺跡位置図（1/10,000）

1．祇園原遺跡　2．長迫遺跡B区　3．長迫遺跡A区　**4．尾漕２号墳**　5．石ヶ迫遺跡A地区
6．石ヶ迫遺跡B地区　7．クビリ遺跡　8．有田塚ヶ原遺跡　9．平島横穴墓群

⑵　尾漕２号墳の調査

尾漕２号墳は、求来里川を望む丘陵の先端に営まれている。この丘陵は古墳の東方、有田塚ヶ原遺跡から尾根伝いに続き、通称「小原」と呼ばれ、古墳の東約100mの地点からは北西方向に細長く延びる。この「小原」から西にある小低丘陵の頂部には、大分自動車道建設に伴い発掘調査が行われた、両袖単室の横穴式石室をもつ５世紀末の尾漕１号墳が立地していた。さらに有田塚ヶ原遺跡の南側にも有田塚ヶ原１・２号墳が存在しており（１号墳は６世紀後半。大分自動車道建設により調査後消滅）、古墳が点在する丘陵地帯といえる。尾漕２号墳の存在した丘陵上は山林として利用され、長迫遺跡のある谷部も元来畑地のようであるが、すでに杉が植林され山林化していた。

尾漕２号墳は試掘時点において既に墳丘上に石材（後に第２主体部となる）が表出しており、この石材を手がかりにトレンチを設定して周溝の有無を確認したところ、墳丘東部で幅約1.2m、深さ約80cmの周溝と高坏などの土師器が検出され、古墳であることが明らかとなった。

この丘陵は掘削対象となったため、以上の試掘調査結果を踏まえて平成８年度より本調査を開始した。まず現況の全体地形測量を行い、古墳の周囲を重機で掘り下げて古墳以外の遺構の存在を確認したが、他の遺構が検出されなかったため調査対象は古墳１基に絞られた。作業は中心主体部と周溝の範囲確認に移り、この段階では中心主体部は発見できなかったが、その後墳頂部の精査により第１主体部の掘り方が検出され、掘り下げを進めた。

調査の経過等の概要については以下のとおりである。

平成８年度

平成８年12月20日　地形測量開始

平成９年２月20日　基準点測量

　　３月14日　空中写真撮影

平成９年度

　　４月30日　大分県教育委員会文化課　高橋徹氏の調査指導

　　６月16日　福岡大学　小田富士雄教授、大分県教育委員会文化課　高橋徹氏の調査指導

　　６月17～19日　九州大学　田中良之教授・金宰賢助手による人骨取上げ

　　６月19日　市長の現地視察、調査成果の記者発表

　　６月21日　九州大学　田中教授、県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　真野和夫氏の調査指導、現地説明会を開催（長迫遺跡と同時開催）

　　６月30日　県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　山田拓伸氏による出土遺物保存処理

　　７月１日　別府大学　本田光子助教授による赤色顔料採取

　　７月24日　現地での調査終了

なお本古墳の調査対象面積は約1,800㎡である。

⑶　調査組織

発掘調査から報告書作成までの関係者は以下のとおりである（職名は当時のまま）。

平成８～９年度／発掘調査・整理作業

日田市林政課

財津洋之助（日田市林政課長）、新川正義（ウッドコンビナート推進室長）、和田忠義（同次長）、熊谷哲郎（同係長）、原田文利（同主査）、佐藤長喜・穴井浩司（同主任）、江島秀吉（同技師）

日田市教育委員会

調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）

調査指導　小田富士雄（福岡大学）、田中良之・金宰賢（九州大学）、本田光子（別府大学）、渋谷忠章・高橋徹（大分県教育委員会文化課）、真野和夫・山田拓伸（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）

調査事務　原田俊隆（日田市教育委員会文化課長）、長尾幸夫（同課長補佐兼文化財係長）、森山一宏（同主任）、衛藤和美・竹原里香（同臨時職員）

調査担当　行時志郎（同主任）、松下桂子（同主事）、森山敬一郎（同嘱託）

調査員　土居和幸（同主任）、吉田博嗣、（同主事）永田裕久（同主事補）

発掘作業員　秋ヤエ子、穐本進、穐本文雄、秋吉ミユキ、安達義男、穴見基彦、池田智之、諫山豊吉、諫山美代子、石井貞美、石井ツヤ子、石田スズ子、伊藤キヨ子、伊藤圭、井上雄一、猪熊スミ子、猪熊忠孝、猪熊誠、猪熊ヨネ、宇野里紗、梅見雅之、江藤勝義、江藤キミ子、荏隈香苗、荏隈キミエ、荏隈典子、荏隈マサ子、荏隈政子、大内史絵、大口友里子、小田友和、小野多美子、鍛冶谷アサヨ、鍛冶谷節子、梶原聖子、梶原シゲ子、梶原利徳、梶原朋子、梶原寛介、鎌倉章、河津雅寛、北澤幾子、木下富三郎、熊谷雄介、黒木智典、牛王克彦、後藤圭、後藤祐司、五島勇美子、五反田静子、財津勲子、財津静子、財津真弓、財津利枝、財津由太、酒井光敏、坂本智子、坂本則子、佐竹俊介、佐藤カスミ、嶋田隆幸、清水孝明、清水忠造、下隈久司、庄内武子、菅田クマエ、菅田三郎、菅田初夫、菅田ミヤ子、園田大、園田光子、園田義雄、高倉厚巳、高倉ハナ子、高倉秀雄、高倉富美子、高倉美津子、高倉美利、高瀬一邦、武内アイ子、田中昇、津江久徳、手島七郎、出野梢、豊田愛子、中島カズ子、中島トミエ、中野哲朗、中野ヨシ子、野内太一郎、長谷部喜吉、林健二、樋口恭子、樋口達人、樋口タニ子、藤原亜衣、堀尾保志、前善知、松岡初次、松岡弘子、松竹智之、松本トキエ、三俣敦史、宮崎正勝、毛利泰雄、森山拓也、森山奈美江、矢幡芳樹、横尾久美子、吉長澄江、吉長ハルエ、渡邉芳五郎

整理作業員　穴井こずえ、穴井トヨ子、井上とし子、宇野富子、梶原ヒトエ、黒木千鶴子、桑野菊美、酒井貴代美、坂本和代、田中静香、平川優子、吉田千津子、和田ケイ子

平成17年度／報告書作成

日田市教育委員会

調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査事務　後藤清（日田市教育委員会文化財保護課長）、高倉隆人（同課長補佐兼埋蔵文化財係長）、伊藤京子（同専門員）、中村邦宏（同主事補）

報告書担当　行時桂子（同主任）

調査員　土居和幸（同副主幹）、今田秀樹・若杉竜太・渡邉隆行（同主任）、矢羽田幸宏（同主事補）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

大分県西部、筑後川上流域に位置する日田市は、標高約80mの沖積地に広がる市街地の周囲を標高約150mの阿蘇溶岩台地が巡り、その外周に標高200～600mの耶馬渓溶岩台地が、市の境界域には700～1,000m級の山々が連なって盆地の景観を形成する。この山々を源とする大小の河川は溶岩台地の合間を縫って沖積地へ流入し、花月川や玖珠川などが合流して筑後川となり有明海へ注ぐ。

尾漕２号墳のある有田塚ヶ原遺跡群は盆地東部の大字東有田に位置し、花月川支流の有田川と求来里川が合流する地点の東側に立地する。このあたりは近世期、日田盆地が江戸幕府の直轄地であった頃には東隣の森藩（玖珠）領となっていた地域である。有田塚ヶ原遺跡群の各遺跡は阿蘇溶岩台地を中心に立地し、全体的には急な斜面が多く見られる。このような立地条件は盆地周辺部によく見られ、小高い場所には古墳が造られ、谷部や小沖積地には集落跡が広がっている。尾漕２号墳はこうした地勢の丘陵端部に営まれている。

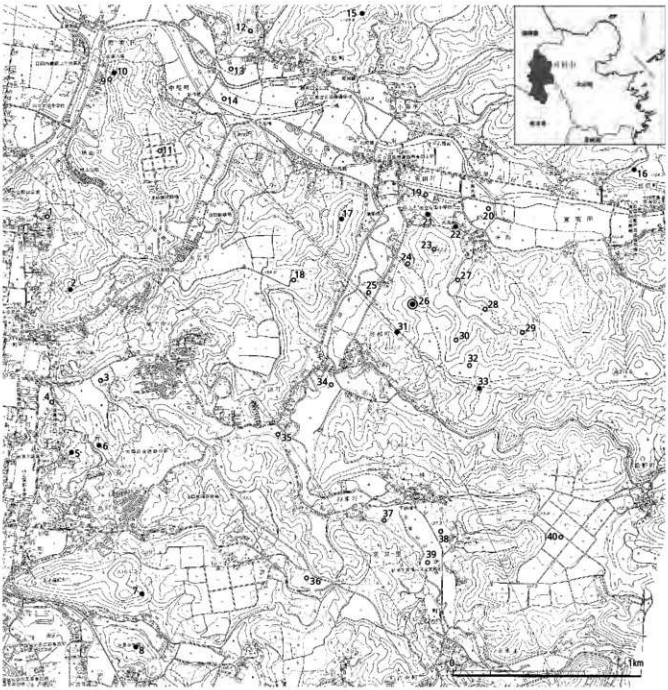
この有田塚ヶ原遺跡群では本報告のほかに、鉄器や装身具類など多数の副葬品が出土した大規模な墓地・平島横穴墓群（29）、縄文時代早期の集石と古墳時代～古代の集落跡・石ヶ迫遺跡Ａ・Ｂ地区（27・28）、古代の鍛冶に関する遺構・遺物が出土したクビリ遺跡（30）、縄文時代の落し穴と古代の建物群・有田塚ヶ原遺跡（32）、弥生時代中～後期の集落跡で大型の掘立柱建物や棟持柱建物を擁する祇園原遺跡（23）、古墳～奈良時代の大集落・長迫遺跡Ａ・Ｂ区（24）が調査されており、順次報告を行っているところである。

また有田塚ヶ原遺跡群の周辺ではほ場整備などの開発に伴う発掘調査が数多く実施されている。求来里川流域では弥生～古墳時代と中近世の集落や中世墓が発見された尾漕遺跡（25）、単室の横穴式石室をもつ円墳・尾漕１号墳（31）、縄文時代晩期の埋甕などが発見された森ノ元遺跡（34）、古墳時代の集落跡や古代の土壙墓が確認された馬形遺跡（35）がある。上流域では求来里平島遺跡（39）や町ノ坪遺跡（38）、金田遺跡（37）など広範囲にわたって弥生時代～近世の集落跡や溝などが見つかっており、なかでも求来里平島遺跡や町ノ坪遺跡ではカマド初現期の竪穴住居跡や初期須恵器が発見され、市内では資料の乏しかった古墳時代中期の様相が明らかになりつつある。

有田川流域に目を転じると、単室両袖式の横穴石室を主体部とする円墳・塔ノ本古墳（21）、市史跡指定を受けた円墳・平島古墳（22）、弥生時代後期の環濠集落と古墳時代後期の集落・平島遺跡（19・20）、５世紀の前方後円墳・城山古墳（16）など古墳時代の遺跡が分布しており、下流には横穴式石室内部より初期須恵器や仿製鏡などが出土した有田古墳（15・消滅）、古墳～古代の集落跡・大行事遺跡（12）、弥生時代と古代の集落や墓・内ノ下遺跡（13）、古代の集落や墓・川原田遺跡（14）、弥生時代の集落や墳墓・佐寺原遺跡（11）などが位置する。

このほか、本遺跡群の西方には箱式石棺を埋葬主体とする夕田古墳（10）、隣接する斜面に築かれた40数基にものぼる夕田横穴墓群（９）、中世大蔵氏の関連施設とされる慈眼山瀬戸口遺跡（１）、縄文～中世の生活痕が発見された赤迫遺跡（３）、奈良時代の墨書土器が出土した大波羅遺跡（４）、直径約35mの円墳・薬師堂山古墳（５）、装飾古墳を含む円墳７基の法恩寺山古墳群（８）などがある。

《参考文献》
千田　昇「日田・玖珠地域の地形－とくに台地地形について－」『日田・玖珠地域－自然・社会・教育－』
大分大学教育学部　1992
行時志郎編『有田塚ヶ原遺跡群』　日田市教育委員会　1999
『平成4年度（1992）～16年度（2004）日田市埋蔵文化財年報』　日田市教育委員会　1994～2005
『日田市史』　日田市　1990　　ほか



1 慈眼山瀬戸口遺跡
2 丸山古墳
3 赤迫遺跡
4 大波羅遺跡
5 薬師堂山古墳
6 丸尾神社古墳
7 北向古墳
8 法恩寺山古墳群
9 夕田横穴墓群
10 夕田古墳
11 佐寺原遺跡
12 大行事遺跡
13 内ノ下遺跡
14 川原田遺跡
15 有田古墳（消滅）
16 城山古墳
17 中尾古墳群
18 中尾原遺跡
19 平島遺跡D・E区
20 平島遺跡A～C区
21 塔ノ本古墳
22 平島古墳
23 祇園原遺跡
24 長迫遺跡
25 尾漕遺跡
26 尾漕２号墳
27 石ヶ迫遺跡A地区
28 石ヶ迫遺跡B地区
29 平島横穴墓群
30 クビリ遺跡
31 尾漕１号墳
32 有田塚ヶ原遺跡
33 有田塚ヶ原古墳群
34 森ノ元遺跡
35 馬形遺跡
36 元宮遺跡
37 金田遺跡
38 町ノ坪遺跡
39 求来里平島遺跡
40 町野原遺跡

第３図　周辺遺跡分布図（1/20,000）

Ⅲ　調査の内容

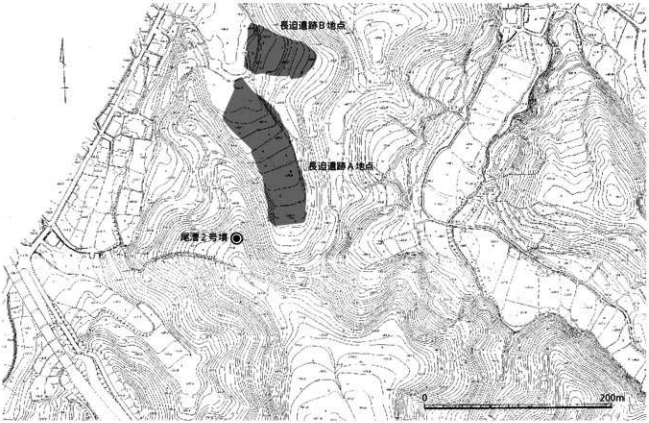
(1)　調査の概要

調査対象となった尾漕２号墳は、台地から八手の葉状に延びる丘陵鞍部の最高所に築かれており、眼下には求来里川沿いに開けた沖積地が一望できる位置に立地する。調査の経過については前節で触れたとおりであるが、本古墳が発見される契機となった第2主体部はすでに墓坑が剥き出しとなり、蓋石と見られる1枚の凝灰岩の板石が墓坑の壁に倒れかかるような状態で確認されていた。

そこで、本調査にあたっては、主軸を墳丘の中心点からこの第2主体部にかかるようにとり、そこから十字に土層確認のためのベルトを残し、その横にトレンチを設定して、墳丘盛土の状況を確認しながら、全体を掘り下げる方法で調査を進めることにした。トレンチを掘り下げた段階で、墳丘北側では旧表土上に盛り土が行なわれていた状況が明らかとなったが、反対に第2主体部や周溝が検出された墳丘南側では盛土の状況は確認されず、現表土直下で茶褐色の地山面が検出された。

墳丘中央から北側にかけての調査では、ベルトを残して盛土部分を全体に除去しながら掘り下げ作業を進めていったが、その結果、墳丘のほぼ中央部で平面長方形を呈した墓坑と見られる跡(第1主体部)が検出された。この墓坑は埋土の状況から未掘であることがわかったため、県文化課のご指導をいただきながら、墳丘に残したベルトとは別に主体部の追葬状況を確認するためのベルトを設定し、慎重に墓坑内の掘り下げ作業を進めることにした。

写真４　試掘調査風景



第４図　尾漕２号墳位置図（1/4,000）

墓坑の確認面から約60cmほど掘り下げたところで３枚の凝灰岩の板石が縁合わせで検出され、この段階で墓坑ベルトの土層確認を行なった結果、追葬を暗示する２本の不連続なラインが確認されたため、蓋石を開ける前段階で複数の被葬者が埋葬されている可能性が想定された。

土層記録後は、蓋石の実測を行ったあと蓋石の除去に移り、蓋石と同様に凝灰岩の大きな板石を用いて造られた箱式石棺が検出された。その中からは頭骸骨の数から３体分と推測される人骨とともに、粘土枕、素環頭の鉄刀と刀子、縦櫛などの副葬品が出土した。人骨については、九州大学田中良之・金宰賢先生に実測や取り上げをお願いし、出土遺物については実測を行った後、県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館山田氏に出土遺物の取り上げおよび保存処理を行っていただいた。

その間も第２主体部の個別実測、周溝部分の掘り下げおよび実測を進め、さらに盛土下の第１主体部以外の遺構の確認作業を並行して行なったが、古墳本体以外の遺構の存在は確認されなかった。

以下、調査で確認された墳丘、第１・第２主体部、周溝について、説明を加えることにする。

⑵　遺構と遺物

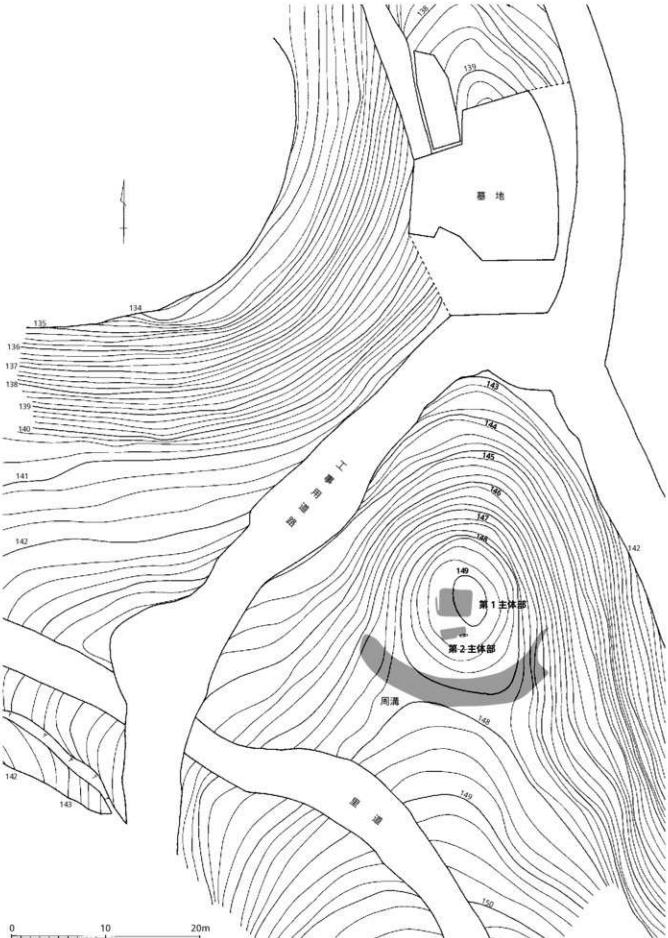
1)　墳丘（第５・６図、写真図版２）

調査以前の地形は、後に周溝が確認された位置のあたりで傾斜が一端緩くなり、そこから主体部の確認された墳丘頂部に向かって１ｍほどの高まりが見られた。前項で触れたように第２主体部より南側では現表土直下で地山面が確認されており、もともとなだらかな丘陵を削り出して古墳の墳形を整えたものと推測される。

反対に北側では、第６図にみるように、旧表土（24層）上に盛土と考えられる層が確認され、またその盛土状況を見ると白色の地山粘土ブロックの混入した12・14・23層と18～20層との間に黒褐色で赤灰色の粘土ブロックを含んだ17層が確認され、版築を行なったと見られる形跡もうかがえた。このことから、墳丘北側では南側とは逆に盛土を行うことによって墳形を整えたものと推測される。残存した墳丘盛土部分の厚さは最大で約40cm、盛土が見られた墳端の最も低い部分と周溝までの距離は約16mを測る。また墳丘中央部分では、盛土の下から旧表土を掘り込んで造られた中心主体部（第１主体部）が検出された。

写真５　墳丘測量風景

写真６　調査指導風景



第5図　調査前地形測量図（1/400）

2）第１主体部（第７・８図、写真図版２・３）

第１主体部の調査の工程はこれまで説明してきたとおりであるが、第７図の土層図を中心にこの主体部の構築過程や埋葬の状況について報告する。

この主体部には大きな凝灰岩の板石５枚と安山岩の板石１枚（南側壁のうち東側の棺材）を使用した箱式石棺が中心に据えられ、その上に凝灰岩の板石３枚を縁合わせに被せ、隙間を白色粘土で目張りしていた。棺の床面は白灰色の粘土でほぼ平坦に整形し、棺の裏込めには凝灰岩のブロックや白灰色の粘土、黄褐色の地山ブロックなどが使用されており、棺全体の形をつくりながら、並行して周囲を埋めていったものと推測される。

石棺のプランは長軸約1.9m、短軸約0.6m、床面までの深さ約80cm、主軸方向はN－89°－Wを測る。また、掘り方のプランは長軸約3.6m、短軸約2.8m、掘り方の深さは約155cmを測る。この棺の掘り方の断面を見ると、棺の周囲に人が立てるほどの平坦な段が設けられており、棺を整形する際の作業を考えた上で２段構成にしたものと思われる。この段より約20cm高い位置に蓋石が置かれていたが、そこまでは棺を固定するために周囲に土を数cmずつ入れて、版築状に固定していったことが土層観察からうかがえる。

この蓋石より上の埋土の状況は、主体部の縦・横の土層図の両方に見られるとおり、層位的に連続性を持たないラインが２ヶ所ほど確認され、明らかに一端埋葬が終了し墳丘が埋まった後に蓋石まで掘りなおした痕跡がうかがえた。このラインは追葬時の掘り方のラインではないかと推測していたが、蓋石を除去して棺内の人骨を精査した田中先生より、３体の人骨のうち、２体の頭骸骨が人為的に移動されていることなどの指摘があり、追葬行為が行なわれていたことが明らかとなった。また、棺内には多量の赤色顔料が棺材や人骨に付着して見られた。本田先生によるこれらの顔料の分析から、棺材にはベンガラが、また人骨には水銀朱が用いられていることがわかった。

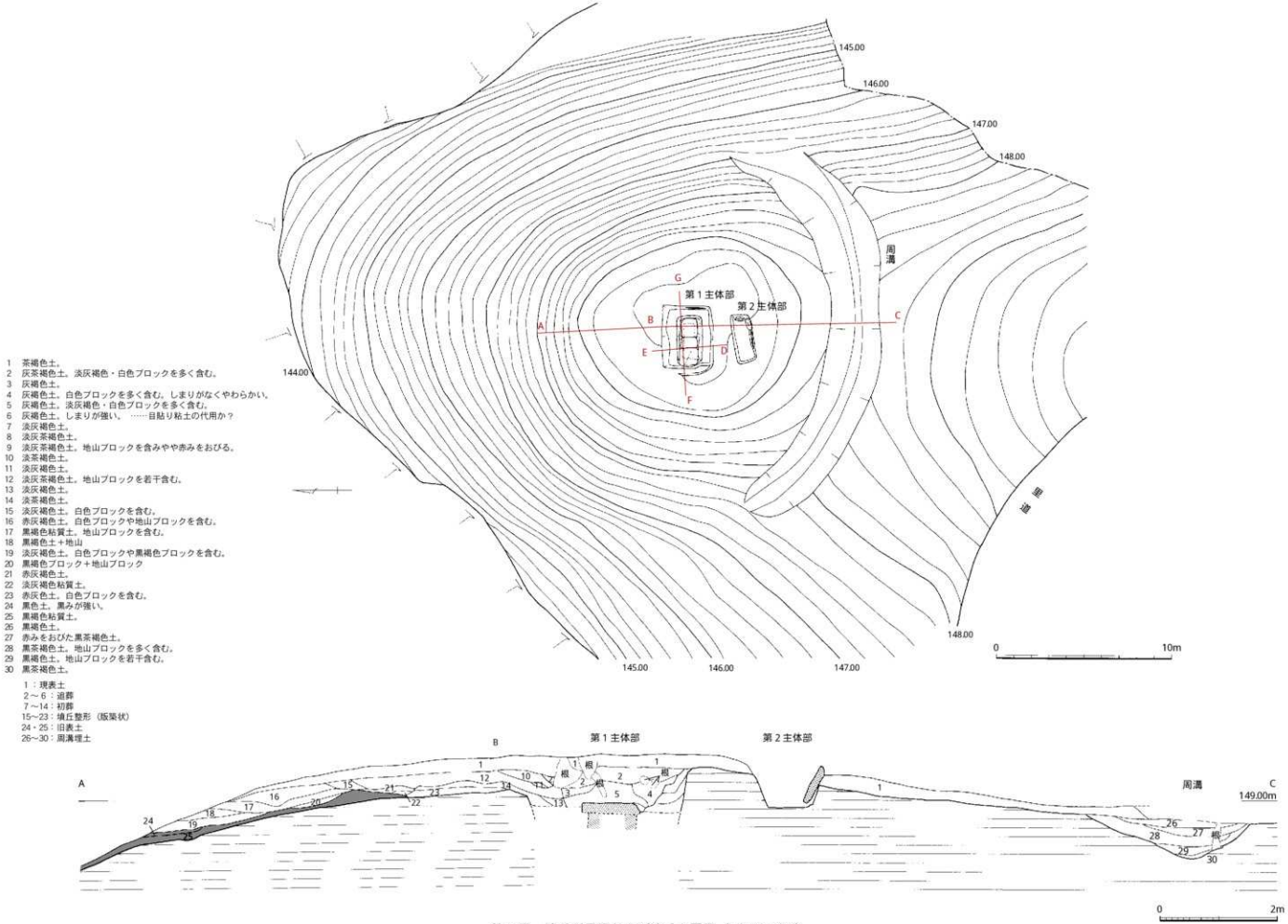
第１主体部出土遺物（第９図、写真図版５）

ほとんどすべての遺物は棺東部の１号人骨頭骸骨周辺より出土している。

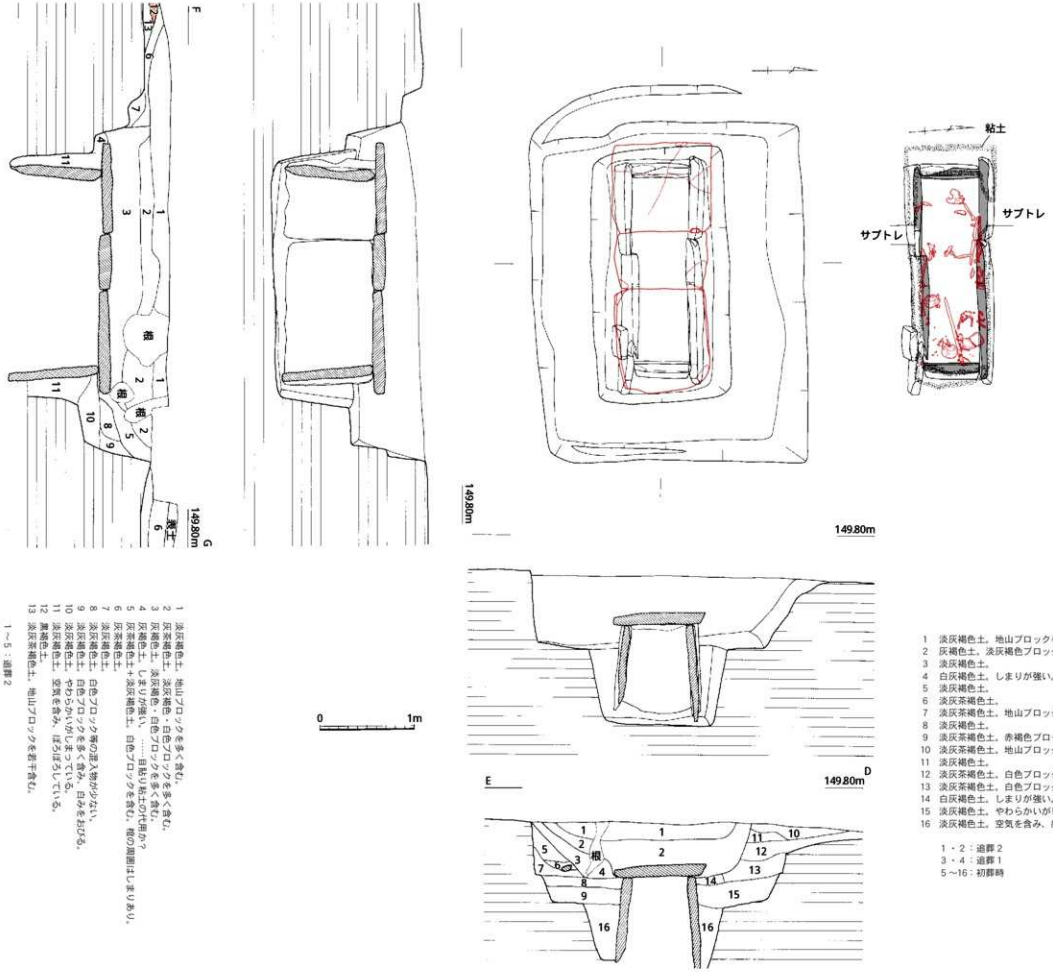
１・２は刀子である。いずれも鹿角製の柄を装着している。１は残存長約9.4cm、２は残存長約7.5cmを測る。７は素環頭大刀である。素環頭の一部は風化していたが、全長約74.6cm、刃渡り約57cm、刃部最大幅約2.6cm、刃部背の最大厚約0.6cmを測る。素環頭と刀の接続方法については鍛造により刀本体に素環頭を取り付けたことがうかがえる。また、柄の部分には木質材に木皮を重ね、その上から銅版を巻きつけている。さらに刀部分には木質およびその痕跡が付着しており、本来鞘が存在したと考えられる。

３～６は縦櫛である。漆膜が残存するものの、その内部は腐食して空洞となっており、材質は不明である。３は残存長約4.3cm、残存幅約3.4cmを測る。４は残存長約1.5cm、残存幅約1.8cmを測る。５は残存長約1.4cm残存幅約1.1cmを測る。６は残存長約1.4cm、残存幅約1.4cmを測る。

写真７　人骨取り上げ風景



第６図　墳丘測量図および墳丘土層図（1/200、1/60）



1　淡灰褐色土。地山ブロックを多く含む。
2　灰褐色土。淡灰褐色ブロックを若干含む。
3　淡灰褐色土。
4　白灰褐色土。しまりが強い。　……目貼り粘土の代用か？
5　淡灰褐色土。
6　淡灰茶褐色土。
7　淡灰茶褐色土。地山ブロックを含む。
8　淡灰褐色土。
9　淡灰茶褐色土。赤褐色ブロックを含む。粘性強い。
10　淡灰茶褐色土。地山ブロックを多く含む。
11　淡灰褐色土。
12　淡灰茶褐色土。白色ブロックを若干含む。やや赤みをおびる。
13　淡灰茶褐色土。白色ブロックをわずかに含む。
14　白灰褐色土。しまりが強い。　……目貼り粘土の代用か？
15　淡灰褐色土。やわらかいがしまっている。
16　淡灰褐色土。空気を含み、ぼろぼろしている。

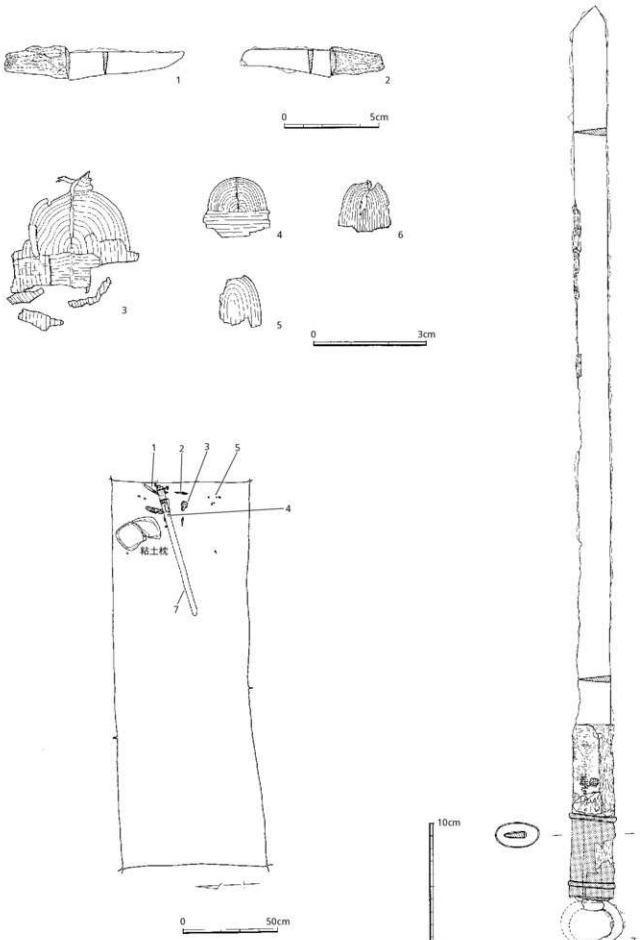
1・2：追葬2
3・4：追葬1
5～16：初葬時

1　淡灰褐色土。地山ブロックを多く含む。
2　灰茶褐色土。淡灰褐色・白色ブロックを多く含む。
3　灰褐色土。淡灰褐色・白色ブロックを多く含む。
4　灰褐色土。しまりが強い。……目貼り粘土の代用か？
5　灰茶褐色土＋淡灰褐色土。白色ブロックを含む。根の潜頭はしまりあり。
6　灰茶褐色土。
7　淡灰茶褐色土。
8　淡灰褐色土。
9　淡灰褐色土。白色ブロック等の混入物が少ない。
10　淡灰褐色土。白色ブロックを多く含み、白みをおびる。
11　淡灰褐色土。やわらかいがしまっている。
12　淡褐色土。空気を含み、ぼろぼろしている。
13　淡灰茶褐色土。地山ブロックを若干含む。

1～5：追葬2
6・7：追葬1
8～11：初葬
12：旧表土
13：地山

第７図　第１主体部実測図（1/40）

第８図　第１主体部人骨・遺物出土状況実測図（1/10）



第９図　第１主体部出土遺物実測図（1/1、1/2、1/3）

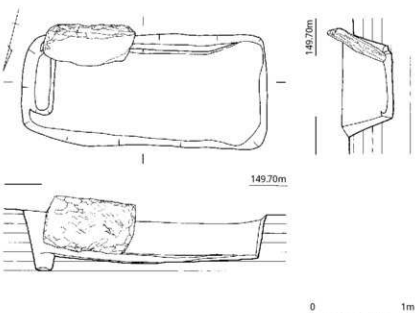
3）第２主体部（第10図、写真図版４）

第２主体部は調査の当初から墓坑が確認され、蓋石と推測される凝灰岩の板石が墓坑の壁に倒れかかるように表出していた。地元の人の話によれば、この中から大きな刀が１口出土していたということであるが、その刀の所在や詳細については不明である。

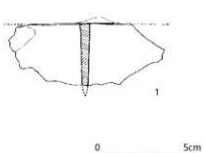
この主体部を掘り進める中で、かつて出土したと伝えられる鉄刀の一部かと考えられる遺物が棺内から出土した。また、第２主体部の棺のプランは明らかにすることはできなかったが、残存する棺材が第１主体部と同様に凝灰岩の板石であることから、こちらもおそらく石棺であろうと推測される。掘り方のプランは長軸約2.6m、短軸約1.2m、深さ約45cm、主軸方向はN－75°－Eを測る。

第２主体部出土遺物（第11図、写真図版５）

１は鉄刀片である。残存幅約3.3cm、背の最大厚約0.5cmを測る。



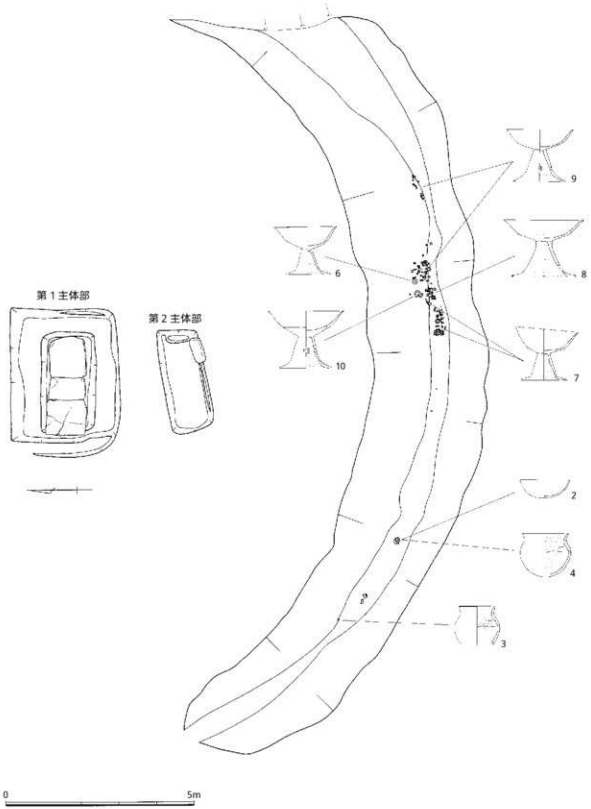
第10図　第２主体部実測図（1/40）



第11図　第２主体部出土遺物実測図（1/2）

4）周溝（第12図、写真図版４）

周溝は第６図や第12図に見られるように、墳丘を意識して、尾根を分断するように半円形に巡らせていた。溝の最大幅は約3.0m、深さは約65cm、溝の断面は「V」字状を呈していた。溝底のレ

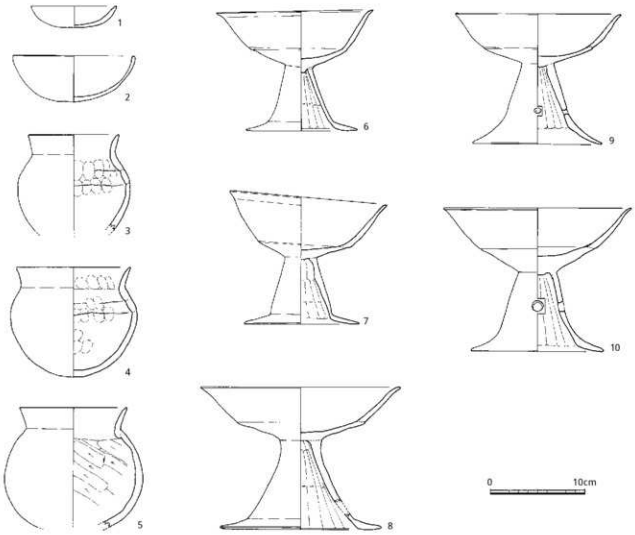


第12図　第１・２主体部および周溝実測図（1/100）

ベルは、溝のほぼ中央部分から東西両側に向かって低くなっていた。溝埋土の堆積状況を土層から観察すると、各層ともレンズ状を呈しており、人為的に埋められた様子は確認できなかった。また周溝最下層（第6図29層）からは、第2主体部に近い位置でまとまって土師器が出土した。

周溝出土遺物（第13図、写真図版5）

1・2は椀である。1は浅く、2は深いタイプである。3～5は甕である。いずれも口縁部は「く」の字に外反し、胴部は球形を呈している。つくりは荒く、粘土紐のつなぎ目が顕著に残る。3・5の底部は欠損しているが、意図的に穿孔が行なわれた様子はうかがえなかった。6～10は高坏である。いずれもしっかりとしたつくりで、体部は大きく開き、脚部はラッパ状に開く。9・10には脚部に穿孔が1箇所施されている。



第13図　周溝出土遺物実測図（1/4）

Ⅳ　調査のまとめ

古墳の築造時期について

本古墳の築造に関わる時期を検討するにあたり、おもな手がかりになるものとして、①周溝内出土遺物、②主体部に使用された石材が挙げられる。

①については、高坏の体部が脚部に比して大きく、また甕も全体的に球形の胴部を呈しており、布留式系土器の名残りが見られる。これらの遺物は、荻鶴遺跡鍛冶遺構・祭祀遺構出土遺物、大肥中村遺跡２号竪穴住居・２号溝出土遺物、石ヶ迫遺跡７号竪穴住居出土遺物など[注1]５世紀前半から中頃とされる遺構の出土遺物とほぼ同時期かやや古い時期のものと考えられる。

また②については、１号主体部の棺材に凝灰岩の板石を使用しており、同様の例として草場第二遺跡17号円形墓（200号石棺墓）や大迫遺跡26号墓などが挙げられる[注2]。日田市内では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて石棺墓が墓地の主体を占めているが、大部分は安山岩の割石を主体としており、凝灰岩の例は先の２例のみである。とくに草場第二遺跡例では、棺外副葬として古式須恵器を含む遺物がまとまって出土し、５世紀中葉の築造時期と推定されており、大迫遺跡でも安山岩を利用したものよりも時期が後出することが指摘されている。

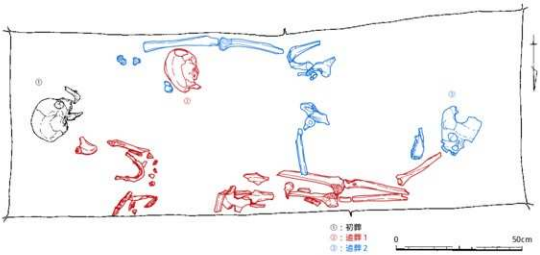
したがって本古墳の時期については、主体部に用いられた石棺材の特徴が新しいこと、及び周溝出土遺物の形式から、５世紀初頭から前半代にかけての時期と推測される。

注1）行時志郎編『荻鶴遺跡』　日田市埋蔵文化財調査報告書第９集　日田市教育委員会　1995
　　行時志郎・行時桂子編『大肥中村遺跡』　日田市埋蔵文化財調査報告書第62集　日田市教育委員会　2006
　　行時桂子編『石ヶ迫遺跡』　日田市埋蔵文化財調査報告書第89集　日田市教育委員会　2004
注2）高橋徹編『草場第二遺跡』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（１）　大分県教育委員会　1989
　　村上久和他編『日田条里遺跡群／佐寺横穴墓群／大迫遺跡／白岩遺跡／下綾垣遺跡』
　　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（６）　大分県教育委員会　1997

（付記）１号主体部の埋葬状況について（第14図）

このことについては、九州大学田中良之先生により述べられる部分であるが、分析編は後日報告予定であるため、ここでは第１主体部棺内の人骨出土状況について、先生より調査時にご指摘いただいた人骨の位置関係についてのみ報告させていただくことにする。

頭骸骨の数は３つあるが、この中で同一の被葬者のものである人骨と判断されたものを第14図に示した。これらの埋葬順については①→②→③の順で埋葬され、③の埋葬の際に①②は両側に移動されたようである。③について体部以下がほとんど残っていないのは、棺内の浸水と目貼粘土の崩落により消滅したものと思われる。



第14図　第１主体部人骨実測図（1/15）

第２表　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第13図－１	周溝	土師器	坏	(9, 0)	－	－	2, 3	不明	不明	ABC	良好	淡褐色	淡褐色	
第13図－２	周溝	土師器	坏	(12, 7)	－	－	4, 9	不明	不明	ABC	良好	淡褐色	淡褐色	
第13図－３	周溝	土師器	壺	(9, 6)	－	－	(10, 1)	不明	指頭圧痕	ABC	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	
第13図－４	周溝	土師器	甕	(12, 0)	－	－	11, 6	不明	指頭圧痕	ABC	良好	淡褐色	淡褐色	胎土粗い
第13図－５	周溝	土師器	甕	(11, 4)	－	－	(12, 7)	不明	ケズリ	ABC	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	
第13図－６	周溝	土師器	高坏	16, 6	－	11, 8	12, 6	不明	ケズリ	ABC	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	
第13図－７	周溝	土師器	高坏	16, 7	－	12, 3	13, 6	不明	ケズリ	ABC	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	胎土粗い
第13図－８	周溝	土師器	高坏	21, 2	－	17, 0	15, 0	不明	ケズリ	ABCD	良好	淡褐色	淡褐色	
第13図－９	周溝	土師器	高坏	(17, 6)	－	13, 8	13, 8	不明	ケズリ	ABC	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	
第13図－10	周溝	土師器	高坏	19, 8	－	14, 0	15, 2	不明	不明	ABC	良好	暗褐色	暗褐色	

※単位はcm。（　）は現存長・重。
胎土…A：角閃石　B：石英　C：長石　D：赤色粒子　E：白色粒子　F：黒色粒子　G：雲母　H：砂粒

第３表　出土鉄器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量			備考
				長さ	刃部最大幅	刃部厚さ	
第９図－１	１号主体部	鉄器	刀子	9, 4	1, 4	0, 3	鹿角製柄頭残存
第９図－２	１号主体部	鉄器	刀子	7, 5	1, 4	0, 3	鹿角製柄頭残存
第９図－７	１号主体部	鉄器	素環頭大刀	74, 6	2, 6	0, 6	柄部に木質、木皮、銅版残存。環外径：(4, 9cm×3, 8cm)
第11図－１	１号主体部	鉄器	直刀	(7, 4)	(3, 3)	0, 5	刃部破片

※単位はcm。（　）は現存長。

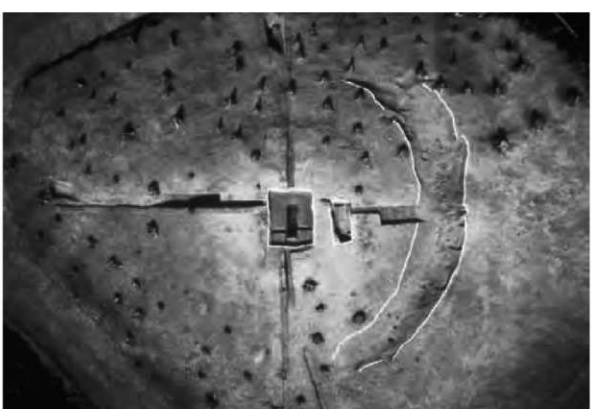
第４表　出土漆製品観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量		色調	備考
				長さ	最大幅		
第９図－３	第１主体部	漆製品	縦櫛	(4, 3)	(3, 4)	黒褐色	湾曲結歯式
第９図－４	第１主体部	漆製品	縦櫛	(1, 55)	(1, 8)	黒褐色	湾曲結歯式
第９図－５	第１主体部	漆製品	縦櫛	(1, 4)	(1, 1)	黒褐色	湾曲結歯式
第９図－６	第１主体部一括	漆製品	縦櫛	(1, 4)	(1, 4)	黒褐色	湾曲結歯式

※単位はcm。（　）は現存長。

写真図版 1

近景（北東から）



近景（真上から）

近景（南から）

墳丘築造状況

周溝土層

墳丘掘下げ状況

第 1（左）・第 2（右）主体部検出状況

第 1 主体部追葬状況①

第 1 主体部追葬状況②

第 1 主体部追葬状況③

写真図版 3

蓋石検出状況①

蓋石検出状況②

蓋石の加工痕

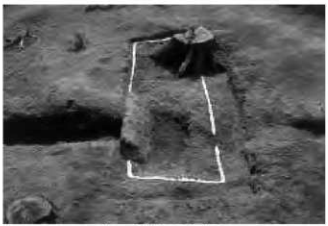
蓋石裏面

蓋石除去状況

石棺検出状況

棺材除去状況

第 1 主体部完掘状況

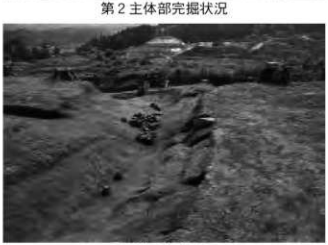


第 2 主体部検出状況

鉄刀出土状況

第 2 主体部完掘状況

第 2 主体部棺材



周溝完掘状況

周溝内遺物出土状況①

周溝内遺物出土状況②

周溝内遺物出土状況③

写真図版５

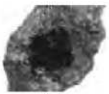
9-1

9-2

9-3

9-4

9-5



9-6

9-7

13-1

13-6

13-2

13-7

13-3

13-8

13-4

13-9

11-1

13-5

13-10

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おこぎ２ごうふん
書　　名	尾漕２号墳
副 書 名	ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	3
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	
編 著 者 名	行時　桂子
編 集 機 関	日田市教育委員会文化財保護課
所　在　地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発 行 機 関	日田市教育委員会
所　在　地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年３月31日　（平成18年３月31日）

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
尾漕２号墳	大分県日田市大字有田字尾漕	44204-6		33°19′36″	130°57′59″	19961220～19970724	1,800㎡	ウッドコンビナート建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尾漕２号墳	古墳	古墳時代	円墳１基（主体部２基）	土師器、素環頭大刀、鉄刀、刀子、縦櫛、人骨3体分	箱式石棺を主体部とする５世紀初頭～前半の円墳

尾 漕 2 号 墳

2006年３月31日

編　集　日田市教育委員会 文化財保護課
〒877-0077　大分県日田市南友田町516-１

発　行　日田市教育委員会
〒877-8601　大分県日田市田島２-６-１

印　刷　三 浦 印 刷 所
〒877-0026　大分県日田市田島本町７-１